

グループスーパービジョンの現状と課題 ー認定社会福祉士制度におけるシステム構築ー

○ 日本福祉大学 野村 豊子 (4514)

片岡靖子 (久留米大学・3183), 潮谷有二 (長崎純心大学・2675),

潮谷恵美 (十文字学園女子大学・2079), 岡田まり (立命館大学・1740)

グループスーパービジョン, 認定社会福祉士, フォーカス・グループ・インタビュー

1. 研究目的

認定社会福祉士・認定上級社会福祉士制度の中核と位置づけされるスーパービジョンであるが、現在実施されている方法は個人スーパービジョンであり、グループスーパービジョンの方法の具体化が急務の課題となっている。欧米におけるソーシャルワーク・スーパービジョンを含むスーパービジョンの歴史的系譜を概観している White と Winstanley (2014) は、Richmond (1878), Freud (1902), Hollis (1938), Kadushin (1976), Proctor (1986) Butterworth (1997) 等の主要論者を挙げているが、グループスーパービジョンに関しては極めて限られている。黒木 (2015) は米国のグループスーパービジョンの歴史的発展、日本における現実的な展開を示唆し、グループスーパービジョンの理論と方法に関してグループ・ダイナミクス、リーダーシップ、グループ・プロセス、グループ凝集性、規範、メンバー役割、グループ文化等について十分な理解が不可欠であることを改めて提示している。認定社会福祉士制度におけるグループスーパービジョンの枠組み及び位置づけを具体化する課題は、ソーシャルワーク・スーパービジョンに関する理論の検討、実践の現状を踏まえ行われている。資格制度におけるシステム構築はそれ自体が早急に具体化される一方で、多様な識者の積極的な協力のもとに、豊かなスーパービジョン文化の醸成を目指すことが目的とされる。

2. 研究の視点および方法

研究方法としては、2016年3月13日、①グループスーパービジョンの実践内容、②グループスーパービジョンのメリット、デメリット、③グループスーパービジョンの効果を高める条件についての3点に焦点を当て、スーパービジョンに関して見識と経験の豊富な研究者による2つのグループ構成(計10名)で、フォーカス・グループ・インタビュー(以下、FGIとする)を実施した。

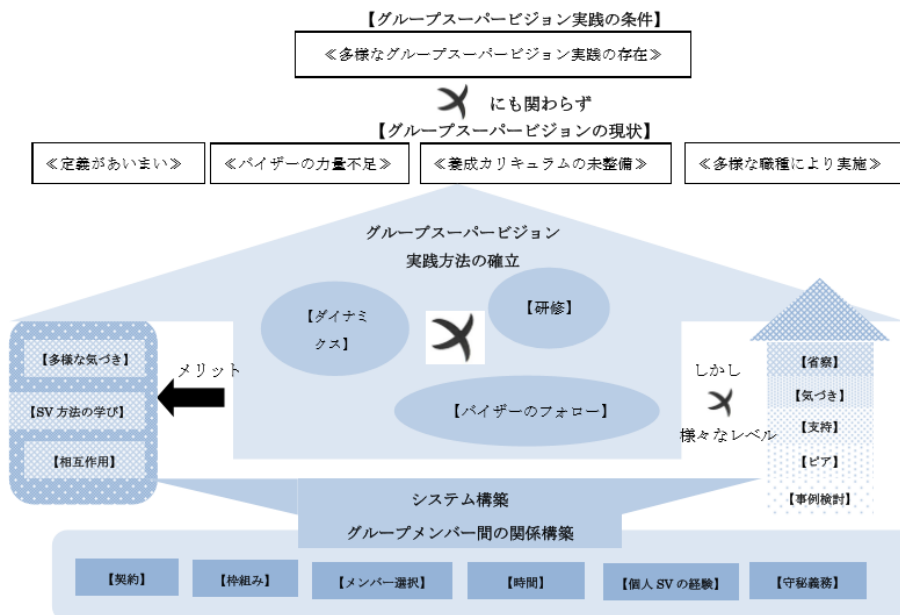
分析方法としては、インタビュー内容をICレコーダーで記録し、逐語記録を作成し、分析手続きとして、山浦(2012)の質的統合法により実施した。分析は、データ収集➡①ラベル作り・②ラベル集め・③表札づくり➡④グループ編成➡⑤見取り図の作成➡⑥本図解の作成➡⑦シンボルモデル図の作成➡⑧叙述化の順で行った。

3. 倫理的配慮

FGIの実施については、文書および口頭にてインタビューの目的および方法について説明を実施し、文書にて承諾を得、インタビュー内容の記録は、厳重に保管し、本研究の分析が終了後、保管義務期間（10年間）後、ただちにシュレッダーにて破棄する。

4. 研究結果

逐語記録から得られたデータを切片化した結果、前述の①の作業において992枚のラベルが作成された。さらに②から⑤までの作業を行った上で、⑥から⑧までの手続きを実施し、シンボルマーク内容及び見取り図を提示した。（図-1）



FGIにより得られた結果として、【グループスーパービジョンの定義】の曖昧さ、【スーパーバイザーの力量】の不足が見られ、効果的な展開となっていない現状と、【スーパーバイザーの力

図-1. グループスーパービジョン実践の条件のシンボルマーク

量】を高めるための【研修方法の創出】、【グループ・ダイナミクスの活用】、【バイザーのフォロー】等により改善されることが必要であることが示された。

5. 考察

グループスーパービジョンをわが国において定着させていくためには、グループスーパービジョンの再定義をはじめとして、理論的な検証の深化が必須となる。また、グループスーパービジョン研修プログラムの開発、グループスーパービジョン実践プロセスの提示、グループスーパービジョンの前提となる環境の整備等、多様な課題が示された。

参考文献

黒木保博(2015)「第5章 グループ・スーパービジョンの方法」日本社会福祉教育学校連盟(監)『ソーシャルワーク・スーパービジョン論』中央法規出版。

山浦晴男(2012)『質的統合法入門-考え方と手順-』医学書院。

本報告は、科学研究費助成事業・基盤研究(B)「社会福祉士のスーパーバイザー養成プログラムの開発と評価」(平成27年度～平成30年度)の研究成果の一部である。